

保育・教育の価値とリスク 感染症流行と、変わる社会のもとで

保護者以外が長時間、保育を担うこと
による影響

では、保護者以外と過ごす時間、集団の中で
過ごす時間が長くなると発達の関係は？

米国の「子どもの健康と発達研究(NICHD)」
が1991〜2007年に行った長期追跡調査
から、次々と論文が出ています。たとえば、調
査開始当初、0〜3歳だった子どもたちを15歳
時に調べた結果の分析(1364人)によれば、
・保育の質が高いと、15歳時の認知能力、学業
成績が高く、外に向かう問題行動も少ない。
・集団保育で過ごす時間が長かった子どもは、
リスク行動や衝動性の確率が高い。^{*1}

同じデータから生後15か月時の母子アタッチ
メントを調べた分析(1153人)によると、

長時間保育の悪影響は ないのか？

—「保育」そのものの価値とリスク

9

掛札逸美

KAKEFUDA Itsumi

心理学博士

保育の安全研究・教育センター

心理学博士(健康/社会心理学。専門は安全とコミュニ
ケーションの心理学)。1964年生まれ。筑波大学卒。
健康診断団体広報室に10年以上勤務後、2003年、コ
ロラド州立大学大学院に留学、2008年、博士号取得。
産業技術総合研究所特別研究員を経て、2013年、
NPO法人保育の安全研究・教育センター設立(2020
年に任意団体化)。厚生労働省「平成27年度教育・保
育施設等の事故防止のためのガイドライン等に関する
調査研究事業検討委員会」委員の他、死亡事故の検証
委員等も務める。

園にいる時間の長さはアタッチメント型の違い
と無関係なもの、「子どもに対する母親の反
応性が低い+保育の質が低い」場合に安定型が
少ないという関係が見られました。^{*2}

NICHDのデータと別のデータを使って、
無秩序型アタッチメントが発現する「長時間」
の線引きを割り出した分析では、「週60時間を
超えると、リスクが幾何級数的に上がる」とい
う結果が得られました。^{*3}

対応に苦慮する子ども、保護者は
増えている

前号で紹介した「親心を育む会」が日本保育
学会第73回大会(2020年)で発表した結果
が図1と2です。^{*4}各年度の5歳児クラスを対象
として、在園中、対応に苦慮した子どもの数、

- 対応に苦慮した項目（子ども）
 - ・出来事に対して即座に感情的な反応をする
 - ・不安、神経質、うつの傾向
 - ・体に関連した不調をよく訴える
 - ・他者とかかわろうとしない
 - ・注意を払えない、集中できない
 - ・他者に対する攻撃的な行動
 - ・体幹がしっかりしていない
 - ・活動やモノに対する興味・行動が欠けている、気力がない
 - ・他者とのコミュニケーションが難しい、できない
 - ・言葉が発達段階に対して遅い

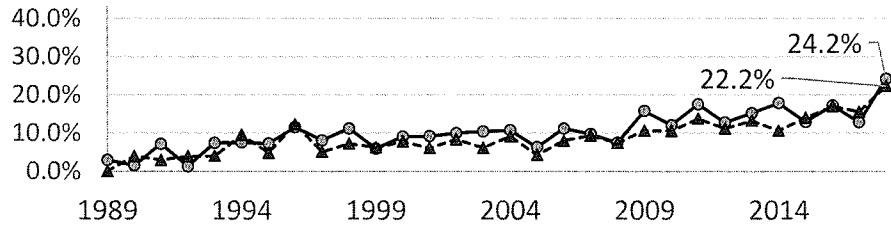


図1 対応に苦慮した子ども、保護者が5歳児クラスに占める割合

- 対応に苦慮した項目（保護者）
 - ・子どもに対する暴力、虐待
 - ・経済状況/及び家庭状況が不安定
 - ・広く、子どもに対するネグレクト
 - ・自分勝手
 - ・場所や相手にかかわらず、感情的に怒ることが多い
 - ・不安が強い、落ち込みやすい
 - ・度を越して教育熱心、しつけが厳しい
 - ・子育てに関して「～いけない」と考え、見方に余裕がない
 - ・保育者が指摘しても、子どもの成長・発達の課題を認めない
 - ・子どもの言いなり
 - ・風評や嘘で周囲の保護者や職員、園運営を混乱させる

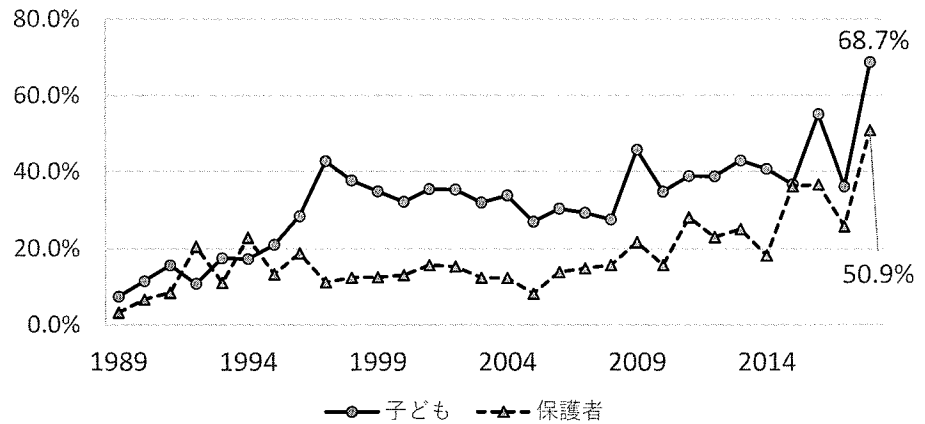


図2 対応に苦慮した子ども、保護者が5歳児クラスに占める割合 (苦慮した項目を1と数えて、苦慮した項目を累積した場合)

子どもの家族で対応に苦慮した数を報告してもらいました。うち、1989年まで遡ることのできた11園をもとにしていきます(項目に当てはまっても対応に苦慮しなければ含まない。主観的報告だが、過大/過小評価は園によつてばらつき、かつ増減を見ることが目的なので問題はない)。

2018年にはクラスの4分の1の子ども、保護者について「在園中、対応に苦慮」していました。また、1人について複数項目、苦慮する場合も多いため、報告があった項目を累積すると、子どもではクラスの約7割近く、保護者でも半分となります。

この結果が長時間保育の影響だと言っているかもしれません。このように振り返って見ても問題がありそうなのに、おそらく世界で最も(システムとして)長時間の未就学児保育をしている日本が、NICHDのような長期データ収集と研究をしていない点が最大の問題です。成長発達は後戻りできませんから、保育や教育、子育ての質がその後の人生に与える影響を検討しなければ、ある時「もしや？」と気づいても手遅れなのです。

対応に苦慮する子ども、保護者が増えている背景には、保護者を育てるシステムが弱い点もあるでしょう。園で長い時間、子どもが過ごしていれば、保護者スキルも身につくようがないでしょう。それが「対応に苦慮」という形で園に戻ってきている可能性もあります。もちろん、園をただ増やすだけの国策ですから、人手不足、職員のスキル不足もあるでしょう。

こうしたことは、漫然と「保育の質を上げましょう」と言っているだけでは解決されません。解決されないまま、「本来もっていた能力を十分に開花できないおとな」(3000万語の格差)「明石書店」でサスキンド博士が何度も使っている言葉)を増やしているのかもしれない。